

蛙のゴム靴

みやざわけんじ
宮沢賢治

松の木や檜ならの木の林の下を、深い堰せきが流れて居をりました。岸には茨いばらやつゆ草やただが一杯にしげり、そのつゆくさの十本ばかり集った下のあたりに、カン蛙がへるのうちはありました。

それから、林の中の檜ならの木の下に、ブン蛙のうちはありました。

林の向ふのすゝきのかげには、ベン蛙のうちはありました。

三疋びきは年も同じなら大きさも大てい同じ、どれも負けず劣らず生意気で、いたづらものでした。

ある夏の暮れ方、カン蛙ブン蛙ベン蛙の三疋は、カン蛙の家の前のつゆくさの広場に座って、雲見といふことをやって居りました。一体蛙どもは、みんな、夏の雲の峯を見ることが大すきです。

じっさいあのまっしろなプクプクした、玉髓ぎよくずみのやうな、玉あられのやうな、又蛋白石たんぱくせきを刻んでこさへた葡萄ぶどうの置物のやうな雲の峯は、誰たれの目にも立派に見えますが、蛙どもには殊にそれが見事なのです。眺ながめても眺めても厭あきないのです。そのわけは、雲のみねといふものは、どこか蛙の頭の形に肖にてゐますし、それから春の蛙の卵に似てゐます。それで日本人ならば、丁度花見とか月見とかいふ処ところを、蛙どもは雲見をやります。

「どうも実に立派だね。だんだんペネタ形になるね。」

「うん。うすい金色だね。永遠の生命を思はせるね。」

「実に僕たちの理想だね。」

雲のみねはだんだんペネタ形になって参りました。ペネタ形といふのは、蛙どもでは大へん高尚かうしやうなものになってゐます。平たいことなのです。雲の峰はだんだん崩れてあたりはよほどうすくろくなりました。

「この頃ころ、ヘロンの方ではゴム靴ぐつがはやるね。」ヘロンといふのは蛙語です。人間といふことです。

「うん。よくみんなはいてるやうだね。」

「僕たちもほしいもんだな。」

「全くほしいよ。あいつをはいてなら粟くりのいがでも何でもこはくないぜ。」

「ほしいもんだなあ。」

「手に入れる工夫はないだらうか。」

「ないわけでもないだらう。たゞ僕たちのはヘロンのとは大きさも型も大分ちがふから拵こしらへ直たださないと駄目だめだな。」

「うん。それはさうさ。」

さて雲のみねは全くくづれ、あたりは藍色あゐになりました。そこでベン蛙とブン蛙とは、「さよならね。」と云いってカン蛙とわかれ、林の下の堰を勇ましく泳いで自分のうちに帰って行きました。

※

あとでカン蛙は腕がへるを組んで考へました。桔梗色ききやうの夕暗ゆふやみの中です。

しばらくしばらくたってからやっと「ギツギツ」と二声ばかり鳴きました。そして草原をペタペタ歩いて畑にやって参りました、

それから声をうんと細くして、

「野鼠のねずみさん、野鼠さん。まうし、まうし。」と呼びました。

「ツン。」と野鼠は返事をして、ひょこりと蛙の前に出て来ました。そのうすぐろい顔も、もう見えなくなる暗いのです。

「野鼠さん。今晚は。一つお前さんに頼みがあるんだが、きいて呉くれないかね。」

「いや、それはきいてあげよう。去年の秋、僕が蕎麦団子そばだんごを食べて、チブスになって、ひどいわづらひをしたときに、あれほど親身の介抱を受けながら、その恩を何でわすれてしまふもんかね。」

「さうか。そんなら一つお前さん、ゴム靴ぐもぐつを一足工夫して呉れないか。形はどうでもいいんだよ。僕がこしらへ直すから。」

「あゝ、いゝとも。明日の晩までにはきつと持って来てあげよう。」

「さうか。それはどうもありがたう。では願ひするよ。さよならね。」

カン蛙は大よろこびで自分のおうちへ帰って寝てしまひました。

※

次の晩方です。

カン蛙は又畑に来て、

「野鼠さん。野鼠さん。まうし。まうし。」とやさしい声で呼びました。

野鼠はいかにも疲れたらしく、目をとろんとして、はぁあため息をついて、それに何だか大へんおこ憤って出て来ましたが、いきなり小さなゴム靴をカン蛙の前に投げ出しました。

「そら、カン蛙さん。取ってお呉れ。ひどい難儀をしたよ。大へんな手数をしたよ。命がけで心配したよ。僕はお前のご恩はこれで払ったよ。少し払ひ過ぎた位かしらん。」と云ひながら、野鼠はぷいぷい行ってしまったのでした。

カン蛙は、野鼠の激昂げきかうのあんまりひどいの、しばらくは呆あきれてゐましたが、なるほど考へて見ると、それも無理はありませんでした。まづ野鼠は、たゞの鼠にゴム靴をたのむ、たゞの鼠は猫ねこにたのむ、猫は犬にたのむ、犬は馬にたのむ、馬は自分の金沓かなぐつを貰もらふとき、何とかかんとかがまかして、ゴム靴をもう一足受け取る、それから、馬がそれを犬に渡す、犬が猫に渡す、猫がたゞの鼠に渡す、たゞの鼠が野鼠に渡す、その渡しやうもいづれあとでお礼をよこせとか何とか、気味の悪い語ことばがついてゐたのでせう、そのほか馬はあとでゴム靴をごまかしたことがわかったら、人間からよほどひどい目にあはされるのでせう。それ全体を野鼠のねずみが心配して考へるのですから、とても命にさはるほどつらい訳です。けれどもカン蛙がへるは、その立派なゴム靴ぐつを見ては、もう嬉うれしくて嬉しくて、口がむずむず云ふのでした。

早速それを叩たたいたり引っぱったりして、丁度自分の足に合ふやうにこしらへ直し、にたにた笑ひながら足にはめ、その晩一ばん中歩きまはり、暁方あけがたになってから、ぐったり疲れて自分の家に帰りました。そして睡ねむりました。

※

「カン君、カン君、もう雲見の時間だよ。おいおい。カン君。」カン蛙は眼めをあけました。見るとブン蛙とベン蛙とがしきりに自分のからだをゆすぶってゐます。なるほど、東にはうすい黄金色きんの雲の峯が美しく聳そびえてゐます。

「や、君はもうゴム靴をはいてるね。どこから出したんだ。」

「いや、これはひどい難儀をして大へんな手数をしてそれから命がけほど頭を痛くして取って来たんだ。君たちにはとても持てまいよ。歩いて見せようか。そら、いゝ工合ぐあひだらう。僕がこいつをはいてすすつと歩いたらまるで芝居のやうだらう。まるでカーイのやうだらう、イーのやうだらう。」

「うん、実にいゝね。僕たちもほしいよ。けれど仕方ないなあ。」

雲の峯は銀色で、今が一番高い所です。けれどもベン蛙とブン蛙とは、雲なんかは見ないでゴム靴ばかり見てゐるのでした。

そのとき向ふの方から、一疋の美しいかへるの娘がはねて来てつゆくさの向ふからはづかしさうに顔を出しました。

「ルラさん、今晚は。何のご用ですか。」

「お父さんが、おむこさんを探して来いって。」娘の蛙は顔を少し平ったくしました。

「僕なんかはどうかなあ。」ベン蛙が云ひました。

「あるいは僕なんかもいゝかもしれないな。」ブン蛙が云ひました。

ところがカン蛙は一言も物を云はずに、すすつとそこらを歩いてゐたばかりです。

「あら、あたしもうきめたわ。」

「誰たれにさ？」二疋は眼をぱちぱちさせました。

カン蛙はまだすすつと歩いてゐます。

「あの方だわ。」娘の蛙は左手で顔をかくして右手の指をひろげてカン蛙を指しました。

「おいカン君、お嬢さんがきみにきめたとき。」

「何をさ？」

カン蛙はけろんとした顔つきをしてこっちを向きました。

「お嬢さんがおまへさんを連れて行くとき。」

カン蛙は急いでこっちへ来ました。

「お嬢さん今晚は、僕に何か用があるんですか。なるほど、さうですか。よろしい。承知しました。それで日はいつにしませう。式の日は。」

「八月二日がいゝわ。」

「それがいゝです。」カン蛙はすまして空を向きました。

そこでは雲の峯がいままたペネタ型になって流れてゐます。

「そんならあたしうちへ帰ってみんなにさう云ふわ。」

「えゝ、」

「さよなら」

「仕方ないよ。」

「さよならね。」

ベン蛙とブン蛙はぶりぶり怒って、いきなりくるりとうしろを向いて帰ってしまひました。しゃくにさはったまぎれに、あの林の下の堰せきを、たゞ二足にちえっちえっと泳いだのでした。そのあとでカン蛙のよろこびやうと云ったらもうとてもありません。あちこちあるいてあるいて、東から二十日の月が登るころやっとうちに帰って寝ました。

※

さてルラ蛙の方でも、いろいろ仕度をしたりカン蛙と談判をしたり、だんだん事がまとまりました。いよいよあさってが結婚式といふ日の明方、カン蛙は夢の中で、

「今日は僕はどうしてもみんなの所を歩いて明後日あさっての式に招待して来ないといけないな。」と云ひました。ところがその夜明方から朝にかけて、いよいよ雨が降りはじめました。林はガアガアと鳴り、カン蛙のうちの前のつめくさは、うす濁った水をかぶってぼんやりとかすんで見えました。それでもカン蛙は勇んで家を出ました。せきの水は濁って大へんに増し、幾本もの蓼たでやつゆくさは、すっかり水の中になりました、飛び込むのは一寸ちよつとこはいくらゐです。カン蛙は、けれども一本のたでから、ピチャンと水に飛び込んで、ツイツイ泳ぎました。泳ぎながらどんどん流されました。それでもとにかく向ふの岸にのびりました。

それから苔こけの上をずんずん通り、幾本もの虫のあるく道を横切つて、大粒の雨にうたれゴム靴ぐつをピチャピチャ云はせながら、櫓なうの木の下のブン蛙のおうちに来て高く叫びました。

「今日は、今日は。」

「どなたですか。あゝ君か。はひり給たまへ。」

「うん、どうもひどい雨だね。パッセン大街道も今日はいきものの影さへないぞ。」

「さうか。ずるぶんひどい雨だ。」

「ところで君も知ってる通り、明後日あさっては僕の結婚式なんだ。どうか来て呉れ給へ。」

「うん。さうさう。さう云へばあの時あのちっぽけな赤い虫が何かそんなこと云ってゐたやうだったね。行かう。」

「ありがたう。どうか頼むよ。それではさよならね。」

「さよならね。」

カン蛙は又ピチャピチャ林の中を通つてすゝきの中のベン蛙のうちにやって参りました。

「今日は、今日は。」

「どなたですか。あゝ君か。はひれ。」

「ありがたう。どうもひどい雨だ。パッセン大街道も今日はしんとしてるよ。」

「さうか。ずるぶんひどいね。」

「ところで君も知ってるだらうが明後日僕の結婚式なんだ。どうか来て呉れ給へ。」

「あゝ、そんなことどこかで聞いたつけねい。行かう。」

「どうか。ではさよならね。」

「さよならね。」そしてカン蛙は又ピチャピチャ林の中を歩き、プイプイ堰せきを泳いで、おうちに帰ってやつと安心しました。

※

丁度そのころブン蛙はベン蛙のところへやって来たのでした。

「今日は、今日は。」

「はい。やあ、君か。はひれ。」

「カンが来たらう。」

「うん。いまましいね。」

「全くだ。畜生。何とかひどい目にあはしてやりたいね。」

「僕がうまいこと考へたよ。明日の朝ね、雨がはれたら結婚式の前に一寸散歩しようと言つてあいつを引っぱり出して、あそこの萱かやの刈跡かきあとをあるくんだよ。僕らも少しは痛いだらうがまあ我慢してさ。するとあいつのゴム靴ぐつがめっちゃめっちゃになるだらう。」

「うん。それはいいね。しかし僕はまだそれ位ぢや腹が癒いえないよ。結婚式がすんだらあいつらを引っぱり出して、あの畑の麦をほした杭くひの穴に落してやりたいね。上に何か木の葉でもかぶせて置かう。それは僕がやって置くよ。面白いよ。」

「それもいゝね。ぢゃ、雨がはれたらね。」

「うん。」

「ではさよならね。」

蛙かへるの挨拶あいさつの「さよならね」ももう鼻について厭あきて参りました。もう少しです。我慢して下さい。ほんのもう少しですから。

※

次の日のひるすぎ、雨がはれて陽が射しました。ベン蛙とブン蛙とが一緒にカン蛙のうちへやって来ました。

「やあ、今日はおめでたう。お招き通りやって来たよ。」

「うん、ありがたう。」

「ところで式まで大分時間があるだらう。少し歩かうか。散歩すると血色がよくなるぜ。」

「さうだ。では行かう。」

「三人で手をつないでかうね。」ブン蛙とベン蛙とが両方からカン蛙の手を取りました。

「どうも雨あがりの空気は、実にうまいね。」

「うん。さっぱりして気持ちがいゝね。」三足は萱かやの刈跡にやって参りました。

「あゝいゝ景色だ。こゝを通って行かう。」

「おい。こゝはよさうよ。もう帰らうよ。」

「いゝや折角来たんだもの。もう少し行かう。そら歩きたまへ。」二足は両方からぐいぐいカン蛙の手をひっぱって、自分たちも足の痛いのを我慢しながらぐんぐん萱の刈跡をあるきました。

「おい。よさうよ。よして呉れよ。こゝは歩けないよ。あぶないよ。帰らうよ。」

「実にいゝ景色だねえ。もう少し急いで行かうか。」と二足が両方から、まだ破けないカン蛙のゴム靴ぐつを見ながら一緒に云ひました。

「おい。よさうよ。冗談じゃない。よさう。あ痛っ。あああ、たうとう穴があいちゃった。」

「どうだ。この空気のうまいこと。」

「おい。帰らうよ。ひっぱらないで呉れよ。」

「実にいゝ景色だねえ。」

「放して呉れ。放して呉れ。放せたら。畜生。」

「おや、君は何かに足をかじられたんだね。そんなにもがなくてもいいよ。しっかり押へてるから。」

「放せ、放せ、放せたら、畜生。」

「まだかじってるかい。そいつは大変だ。早く逃げ給へ。走らう。さあ。そら。」

「痛いよ。放せたら放せ。えい畜生。」

「早く、早く。そら、もう大丈夫だ。おや。君の靴くつがぼろぼろだね。どうしたんだらう。」

実際ゴム靴はもうボロボロになって、カン蛙がへるの足からあちこちにちらばって、無くなりました。

カン蛙は何とも言へないうらめしさうな顔をして、口をむにゃむにゃやりました。実はこれは歯を食ひし
ばるところなのですが、歯がないのですからむにゃむにゃやるより仕方ないのです。二足はやっと手をは
なして、しきりに両方からお世辞を云ひました。

「君、あんまり力を落さない方がいいよ。靴なんかもうあったってないたって、お嫁さんは来るんだから。」

「もう時間だらう。帰らう。帰って待つてようか。ね。君。」

カン蛙はふさぎこみながらしぶしぶあるき出しました。

※

三疋がカン蛙のおうちに着いてから、しばらくたって、ずうつと向ふから、
露^{ふき}の葉をかざしたりがまの穂を立てたりしてお嫁さんの行列がやって参りました。

だんだん近くなりますと、お父さんにあたるがん郎がへるが、

「こりゃ、むすめ、むこどのはあの三人の中のどれぢゃ。」とルラ蛙をふりかへってたづねました。

ルラ蛙は、小さな目をパチパチさせました。といふわけは、はじめカン蛙を見たときは、実はゴム靴のほ
かにはなんにも気を付けませんでしたので、三疋ともはだしでぞろりとならんでゐるのでは實際どうも困つ
てしまひました。そこで仕方なく、

「もっと向ふへ行かないと、よくわからないわ。」と云ひました。

「さうですとも。間違つては大へんです。よくおちついて。」と仲人^{なかうと}のかへるもうしろで云ひました。

ところがもつと近くによりますと、尚更^{なほさら}わからなくなりました。三疋とも口が大きくて、うすぐろくて、
眼の出た^{ぐあひ}工合も実によく似てゐるのです。これにはいよいよどうも困ってしまったのでした。ところが、そ
のうちに、一番右はじに居たカン蛙がパクツと口をあけて、一足前に出ておじぎをしました。そこでルラ蛙
もやっと安心して、

「あの方よ。」と云ひました。さてそれから式がはじまりました。その式の盛大なこと酒もりの立派なこと
とても書くのも大へんです。

とにかく式がすんで、向ふの方はみな引きあげて行きました。その時丁度雲のみねが一番かゞやいて居りました。

「さあ新婚旅行だ。」とベン蛙が云ひました。

「僕たちはぢきそこまで見送らう。」ブン蛙が云ひました。

カン蛙も仕方なく、ルラ蛙もつれて、新婚旅行に出かけました。そしてたちまちあの木の葉をかぶせた杭あとに來たのです。ブン蛙とベン蛙が、

「あゝ、こゝはみちが悪い。おむこさん。手を引いてあげよう。」と云ひながら、カン蛙が急いでぢぢめる間もなく、両方から手をとって、自分たちは穴の両側を歩きながら無理にカン蛙を穴の上にひっぱり出しました。するとカン蛙の載った木の葉がガサリと鳴り、カン蛙はふらふらと一寸ばかりめり込みました。ブン蛙とベン蛙がくると外の方を向いて逃げようとしたが、カン蛙がピタリと両方共とりついてしまひましたので二足のふんばった足がぶるぶるとけいれんし、そのつぎにはたうとう「ポトン、バチャン。」三足とも、杭穴の底の泥水の中に陥ちてしまひました。上を見ると、まるで小さな円い空が見えるだけ、かゞやく雲の峯は一寸のぞいて居りますが、蛙たちはもういくらもがいてもとりつくものもありませんでした。

そこでルラ蛙はもう昔習った六百メートルの奥の手を出して一目散にお父さんのところへ走って行きました。するとお父さんたちはお酒に酔ってゐてみんなぐうぐう睡ってゐていくら起しても起きませんでした。そこでルラ蛙はまたもとのところへ走って来てまはりぐるぐるまはって泣きました。そのうちだんだん夜になりました。

パチャパチャパチャパチャ。

ルラ蛙はまたお父さんのところへ行きました。
いくら起しても起きませんでした。

夜が明けました。

パチャパチャパチャパチャ。

ルラ蛙はまたお父さんのところへ行きました。
いくら起しても起きませんでした。

日が暮れました。雲のみの頭。

パチャパチャパチャパチャ。

ルラ蛙はまたお父さんのところへ行きました。

いくら起しても起きませんでした。
夜が明けました。

パチャパチャパチャパチャ。

雲のみの。ペネタ形。

ちやうどこのときお父さんの蛙はやっと眼がさめてルラ蛙がどうなったか見ようと思って出掛けて来まし
た。

するとそこにはルラ蛙がつかれてまっ青になって腕を胸に組んで座ったまゝ、^{ねむ}睡ってゐました。
「おいどうしたのか。おい。」

「あらお父さん、三人の中へおっこってゐるわ。もう死んだかもしれないわ」

お父さんの蛙は落ちないやうに気をつけながら耳を穴の口へつけて音をききましたら、かすかにぴちやといふ音がしました。

「占めた」と叫んでお父さんは急いで帰って仲間の蛙をみんなつれて来ました。そして林の中からひかげのかつらをとって来てそれを穴の中につるして、たうとう一ぴきづつ穴からひきあげました。

三足とももう白い腹を上へ向けて眼はつぶって口も堅くしめて半分死んでゐました。

みんなでごまざいの毛をとって来てこすってやったりいろいろしてやっと助けました。

そこでカン蛙ははじめてルラ蛙といっしょになりほかの蛙も大へんそれからは心を改めてみんなよく働くやうになりました。

底本：「新修宮沢賢治全集 第十一巻」筑摩書房

1979（昭和54）年11月15日初版第一刷発行

1983（昭和58）年12月20日初版第五刷発行

※底本は旧仮名ですが、拗促音は小書きされています。これにならない、ルビの拗促音も、小書きにしました。
入力：林 幸雄

校正：土屋隆

2008年2月27日作成

2008年11月30日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

●表記について

●このファイルは W3C 勧告 XHTML1.1 にそった形式で作成されています。